

タイトル 人種差別とアフリカの反差別の哲学

オーガナイザー・提題者 河野哲也(立教大学)

提題者 小手川正二郎(國學院大學)

吉田優貴(東京外国語大学)

田曉潔(筑波大学)

警官による黒人男性射殺をきっかけとして、「黒人だって生きている(Black Lives Matter)」というスローガンは、黒人差別を糾弾する運動の旗印としてアメリカ合衆国から世界に広まった。アフリカ系住民が少ない日本では、マスコミで連日取り上げられているものの、どこか他人事である。しかし私たちは、黒人差別という問題をやり過ぎてよいだろうか。あるいは、せいぜい差別一般の問題として議論すればよいのだろうか。

そうではない。黒人に対する人種差別の背景には、アフリカの社会と文化に対する体系的で継続的な価値の切り下げがある。西洋の近代化を支えたのが植民地支配であり、そのなかでアフリカの社会と文化は一貫して価値が低いものとして蔑まれてきた。この支配は、哲学的・思想的な次元でも行われてきた。ヒューム、アダム・スミス、カント、ヘーゲル、スペンサーなどの18～19世紀の名だたる哲学者たちが、アフリカ人に対する人種差別的言説を表明し、思想的に植民地支配を後押ししてきた。

日本は明治維新以来、文明開化・富国強兵を掲げ、西欧の近代化を見習いながら、同時に、その植民地主義や、人種主義、自文化中心主義をも受け継いできた。この流れは、第二次世界大戦後においても基本的に変わらない。平和こそ希求するようになったものの、人種や民族を階層的に上下に配置する傾向はそのままである。西洋中心主義に対する批判があっても、それはしばしば、日本あるいは東アジアの伝統への回帰といった反動に陥り、自文化中心主義をかえって強めてしまう。日本の哲学は、西洋近代哲学の暗部には目を伏せ、その強化に拍手を送ってきたといつてよい。日本社会におけるアフリカ人が被っている困難への無関心は、アフリカに対する体系的な価値切り下げの一側面なのである。

本ワークショップは、アフリカの反差別、反人種主義、反植民地主義の哲学的・思想的営為を取り上げ、私たちの体系的無関心に対する反省の機会とし、人種主義や自文化中心主義に抗する哲学を練り上げることを目的とする。ここでいう「アフリカの哲学」とは、アフリカ大陸住民とアフリカン・ディアスポラによる哲学的活動を指している。現代のアフリカ哲学は、反植民地主義や独立解放運動と密接に結び付いてきた。それは、政治的言説と分離できず、政治家である哲学者、また文学者や詩人でもある哲学者を生んできた。アフリカ哲学は、西洋化に対する激しい批判と拒否、自由と自立への希求を示している点において、日本の近代化の思想とはある意味で対照をなしている。この点に注目しながら、本ワークショップでは、近代化と西洋化を、アフリカと日本の視点とを比較しながら再解釈してみたい。

そのために、本ワークショップで重視するのは文化人類学との共同作業である。文化人類学は、直接・間接的な植民地行政への関与を伴う他民族研究とともに発展してきた。それゆえに、哲学よりもはるかに早く、植民地主義、人種主義、自文化中心主義への反省に取り組んできた。西洋哲学の新しい動向を追うばかりの日本の哲学界に対して、文化人類学は、世界のさまざまな人々の哲学的営為に関心を寄せてきた。また、アフリカの

哲学、とりわけ、エスノフィロソフィーと呼ばれる伝統的なアフリカの思考法や世界観についての哲学は、文化人類学的なデータから構築されている。そこで、本ワークショップでも、アフリカをフィールドとする二人の文化人類学者に提題者として登壇してもらい、差別を巡るの哲学的議論に参加してもらうことにする。文化人類学との共同することによって、今回のテーマを扱うためだけではなく、新しい哲学のあり方を提示したい。

具体的に4名が以下のような提題を行い、その後フロアとの質疑応答の時間を取る予定である。

まず、河野は、反植民地運動としてアフリカ哲学の歴史を概観する。アフリカ大陸とカリブ海諸国、欧米におけるアフリカ系の人々の反植民地運動と汎アフリカ主義の歴史を追いながら、その政治的・哲学的成果を見る。また、アフリカ人たちが自分たちの伝統的な宗教や教えなどに見られるアフリカの思考法と植民地主義時代にもたらされた西洋的思考との間の緊張関係をどのように生きてきたかを明らかにする。

小手川は、フランス近現代哲学、現象学を専門としてきたが、今回の提題では、西洋哲学を相対化しその前提を問い直す視点としてアフリカ哲学がもちうる可能性について検討する。具体的には、性差・言語・人種という主題について、個人主義的なフェミニズム、英語を公用語とする哲学、白人至上主義という三つの前提をアフリカ哲学(ないしアフリカ出身の哲学者)がいかに問い直してきたのかを考察し、そのポテンシャルを探る。

吉田は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に所属し、ケニアの豊学校での子どもたちの「おどり」など身体的コミュニケーションに注目した研究を行ってきた。今回のワークショップでは、ケニアの特にキリスト教徒が多かった地域での調査中に得た人々の語りを取り上げながら、「アフリカからの問題提起」をおこなう。まず、具体的に次の3点を相互に絡めながら考察してゆく。(1)皮膚の色をはじめとした身体の特徴に関する語り、(2)反白人・反西洋的語り、(3)自生的思想・慣習とキリスト教思想に連続性をみる語り。そのうえで、人々にとって「自分たちとは異質な他者」がいかにして立ち現れ、人々がそうした存在とどう折り合いをつけるのか議論する。

筑波大学の田は、マサイなどアフリカの牧畜社会における子どもの在来知識の習得と伝承について、生態人類学的立場から研究を行ってきた。今回の提題では、まず、アフリカの人種差別と反人種差別の活動とその変遷を概観する。これに際し、植民地時代の冒険家らにより「オリンピック・レベルの身体」・「野蛮な身体」とアフリカ人が表象された事例、および「Black Lives Matter」運動に連なる、2015年のケープタウン大学からの「Rhodes Must Fall」の事例をもととする。その上で、複雑化しつつあるこの二つの活動を理解するため、「自分と他者の境界線」、「デジタル時代における西洋・東洋とアフリカ」、「日常と非日常」の三つのテーマから問題を提起する。

【参考文献】

河野(2020)「現代のアフリカ哲学」『世界哲学史8』ちくま新書。

小手川(2020)『現実を解きほぐすための哲学』トランスビュー。

吉田優貴(2018)『いつも躍っている子供たち』風響社。

Tian, X. (2019). The role of social norms and interaction in the process of learning-by-doing. *African Study Monographs*, 40.

Eze, E.C. (1997). *Race and the Enlightenment*. Blackwell.

謝辞:本発表は、新学術領域補助金計画班「顔と身体表現の比較現象学」(17H06346)の成果の一環である。